

ブラジル人学校「エマヌエウ」

視察レポート

青柳 光昌

多文化セミナリオの補講授業として、岐阜県可児市にあるブラジル人学校「エマヌエウ (EMMANUEL)」を視察してきました。以下はその報告です。

【視察日】2001年8月10日(金)

【視察メンバー】

田村太郎さん(多文化共生センター)、伊藤育雄さん(フロンティアとよはし)、井村美穂さん(保見ヶ丘国際交流センター)、鈴木江理子さん(フジタ未来経営研究所)、青柳光昌(日本財団)
特別参加:鈴木智さん(三重県生活部国際担当) 幅下真紀さん(三重県国際交流財団) 西田マリ-さおりさん(三重県国際交流財団) この3名はセミナリオに参加されている筒井美幸さんのご紹介で今回、特別参加。 合計8名



写真:エマヌエウの正面玄関

エマヌエウ (EMMANUEL) の概要

岐阜県可児市とその周辺市町村(瑞浪市、恵那市、高山市など)から日系ブラジル人の子供(0歳~8年生まで)およそ200名が通う。小学校入学前の子供はそのうち約80名。

2000年5月に開校し、校長のヘナタ(Renata)さん以下14名の教師は本国ブラジルではすべて教師の資格をもっている。

校舎は、閉鎖されたホテルの地下1階と地上2,3階の3フロアを借用している。地下1階にはホテル当時のサウナ風呂施設を利用して、夏には水遊びが出来るようになっており、食堂は地下1階、教室は2,3階の客室だった所をそれぞれ学年別などに分けて利用している。教科書はブラジルから輸入したものを使用している。

授業は午前のみ、午後のみ、全日3つのコースからなっている。生徒には送迎用バスが用意されており、マイクロバス2台、1BOXワゴンタイプを7台所有している。朝の登校時と午後

生徒のほとんどが利用している。

地域との関係

地元の可児市国際協力協会の協力で、空き物件だった現在の建物の紹介を受ける。同協会の理事長が保証人となった。また、教室で使う机や椅子も同協会の仲介で、市の教育委員会から譲り受けた。日本人のボランティアは現在、土屋信男さん一人で、週1回の日本語教室(4歳~10歳を対象)や送迎などを手伝っている。

地域の小・中学校とは盆踊りや文化祭などで交流があり、日本人の子どもたちがエマヌエウを訪問したり、浴衣の提供を受けたりしている。しかし、「協会や地元とのつながりは大切だが、今はなかなか進まない」(土屋さん)、「地元日本側の決定に時間がかかるので、必要なときに支援が得られない」(ヘナタさん)との思いもある。我々の「ブラジルのイベントや舞踏、格闘技などを紹介して地元との交流を図らないのか」との問いには「学校は勉強するところなので、今



写真：教室の様子

は考えていない」とのことだった。

財政

授業料は午前、午後コースは月 30,000 円、全日コースは 48,000 円。(いずれも送迎付き。全日には給食代も含まれる)

現在の建物の賃貸料は 3 階分合わせて月約 150 万円。地元企業等からの寄付はなく、授業料だけが収入源なので、教員の給料を払うと現状でもぎりぎり。景気の低迷で授業料が払えないケースもでてきたので、今後が心配である。

就学と進路

生徒のほとんどが、保護者の口コミでやってくる。また、可見市の外国人登録窓口では同行のパンフレットを置いてもらっている。

昨今の景気低迷からくる雇用環境が非常に不安定になってきている中で、親の経済的事情からエマヌエウを退学し、負担の少ない日本の公立学校へ急に通わせたり、どの学校へも行かせなくなってしまう例も出てきている。親の都合で入退学を繰り返されるのが、子供にとってどれだけ影響があるのか、心配である。

言葉の問題もある。エマヌエウにいる間はほとんどポルトガル語のため、日本語は挨拶程度しか覚えられない。これでは、日本での生活を快適に送ることはできない。逆に日本の学校へ通うと、日本語を急速に覚えるが、ポルトガル語を忘れてしまい、ブラジル人の友人同士でいじめにあったり、また帰国した時に、結局本国で進学、就職がうまくいかない、など中途半端な状態になっている。

このような状況でも、「エマヌエウに通ってきている子供には、非常に学習意欲の高い子供も出てきたことは喜ばしいことだ」と、ヘナタ校長は言う。

保護者は、いずれブラジルへ帰国した時は、高校や大学まで進学してほしいと希望しているが、子供本人はそういった意識はあまりない。学歴を持っていてもブラジルへ帰れば仕事がなく、このまま日本で暮らせるなら、勉強はしなくてもアルバイトで日銭を稼げば良いと考える子供も多い。

今後について

今後の課題としては「現在の授業料を安くするために、日本、ブラジルの行政当局へ働きかけ、補助金などを獲得したい。そのためにも在日のブラジル人学校(約 30 校)の協議会を形成して行きたい」とヘナタ校長は語った。2002 年度からは高等部も新設する予定。

ヘナタ校長自身は、「将来、ブラジルで学校を開くことがあれば、そのときは日本の学校教育の良い部分(例えば掃除は生徒みんなで行うなど)を実践してみたい」と語っていた。

視察者の所感

第 1 印象は非常に広いスペースで、生徒も教師ものびのびとしている印象を受けた。短期間でこれだけの規模のなったのは、ニーズもあるだろうが、経営陣、教師陣の努力によるところが大きいのだろう。抱えている問題は各地のブラジル人学校と同様である。親の教育に対する意識、子供の中途半端状態などである。このエマヌエウに関して言えば、今後は積極的な地元の協力、ボランティアの受け入れが必要であり、それが実現すればさらに大きな成長もあり得るだろう。

また、200 人と規模が大きく、存在感もある割には、地元の日本人社会とのつながりが希薄な印象も受けた。意識的に地元の日本人社会と

の接点をつくったり、財政面や行政へのアドボカシーの面でサポートする中間支援的な NPO が介在することも有効かもしれない。

今後は日本の教育の多様化の側面から実現が期待されているチャータースクールやフリースクールの制度化をにらんで、「私塾」として放置するのではなく、日本の地域社会の問題として議論してゆく必要がある。アメリカのエスニックマイノリティによるチャータースクールなどの先例から学びたい。



写真：元サウナが水遊びの場に